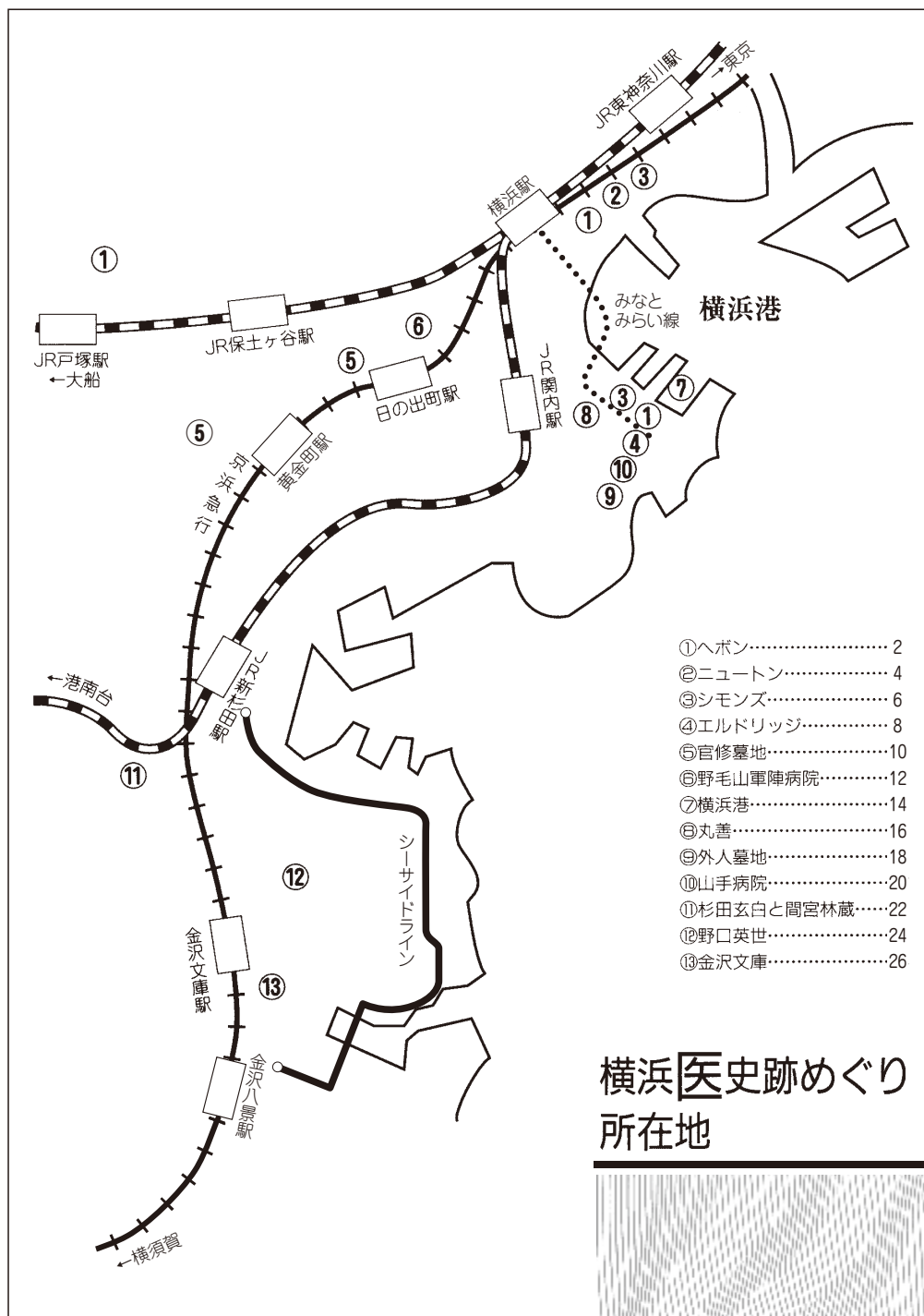


「横浜医史跡めぐり」改訂にあたり

私達の郷土、ヨコハマには公立、私立を問わずいくつかの博物館や資料館がありますが、医学・医療についてはほとんど皆無といってもよいでしょう。ご承知のようにヨコハマは1859年の開港を機にヘボン、シモンズを嚆矢として多くの医師が来日し我が国における医療の歴史をつくり上げましたが、1923年の関東大震災により又、第二次世界大戦による横浜大空襲により消失の運命をみるに至りました。戦後に至り市内、市外を問わず僅かに残された医学・医術の遺産を後世に伝えようと特に一般市民の皆様や学生達に啓発の意味を含めて編纂することに致しました。

初版は平成7年(1995年)に刊行し6名の執筆者と2名の編集者で刊行されましたが以来、第7版を平成23年(2011年)に刊行し総冊数は約5,000部を超え、読者からは好評を得ています。元来、当初の目的でありましたヨコハマに医学資料館をとの想いは心にありながら時期尚早との判断から僅か30ページの小冊子のなかのステージにご満足を得ていただければ至上の幸と存じます。

一般財団法人横浜総合医学振興財団
理事長 井 出 研



ヘボンの足跡

J.C. Hepburn



宗興寺境内にあるヘボン診療所跡

ガイド

成佛寺
宗興寺(そうこうじ)
居留地39番地
明治学院戸塚キャンパス
※地図は5、9ページ参照

(安政5年)ポーハタン号上でハリスと岩瀬の間で「日米修好通商条約」が結ばれました。その条約の第8条には宗教の自由が記されていました。すなわちアメリカ人は日本で自国の宗教を信じて良く、礼拝堂を居留地に置いても良い。ただし日本人の神仏の礼拝を妨げてはならない、というものでした。200年以上もの間鎖国をして、外人を隔絶してきた日本がこうした条約を結んだことはまさに晴天の霹靂でした。

ニューヨークで眼科を開業中であったヘボンはこの朗報に接し、早速長老教会の許可を得て、自宅と病院を1万ドルで売却して、翌1859年開国したばかりの横浜に上陸したのでした。日本へ来たのは勿論この時が初めてでしたが、16年前の1843年から約2年間彼は中国のアモイでおよそ2,000人の患者の診療をした経験がありました。

横浜でのヘボンは 1. 神奈川での生活、2. 山下町での診療、3. 山手での聖書翻訳の3期に分けることができます。幸なことに横浜ではそのいずれの場所にも彼を偲ぶ碑などが現存しています。ヘボンは来日後ただちに神奈川の成佛寺に住み、宗興寺で約5か月診療を行いました。成佛寺は神奈川区本町にあり、東神奈川駅から徒歩10分足らずの距離で、門の前には、「史跡外国宣教師宿舎跡」の碑が建っています。神奈川区幸ヶ谷の宗興寺はそこから4～5分の距離でその境内には、「ヘボン博士診療所跡」の碑が昭和53年ヘボン博士

1 神奈川のヘボン

ヘボンすなわちJames Curtis Hepburn (1815-1911) は、アメリカ、ペンシルバニア州で生まれました。プリンストン大学で文学を学び、のちペンシルバニア大学で医学博士の学位を得ました。彼はいつの日か日本へ赴き、医療を行う一方伝道を志していました。

1853年(嘉永6年)ペリーが浦賀へ来航、日本に開国を迫りました。その5年後の1858年

日本近代医術 の創始者 横浜に上陸



居留地39番跡の記念碑

顕彰会の手によって建てられました。ヘボンの場合、診療費用はすべて無料でした。神奈川では約3年間生活していたのに診療がわずか半年というのは、世情不安のため如何に幕府の制約が厳しかったかがうかがわれます。

2 居留地山下町での診療

国の方針に従い横浜居留地建設に参画するため、ヘボンは1862年居留地39番（旧谷戸橋畔）に住居を新築、診療開始の準備を始めました。ここでヘボンは診療のほか「和英語林集成」の出版、第一長老教会の設立などに努め、一方、夫人は英学塾を開きました。居留地39番は彼が20年間も住んだところで、現在中区山下町テレビ神奈川の隣、法務省横浜合同庁舎の建っている場所です。現在は「ヘボン博士邸跡」の記念碑と彼のレリーフの刻まれた碑が並んでいます。いずれも昭和24年彼の来日90周年を記念して建てられたものです。

3 最後の居住地

港の見える丘公園を目指して上り、外人墓地を右手奥に眺め、大佛次郎記念館、神奈川近代文学館を通り過ぎ韓国領事館の丁字路を右折して約100メートル入った右側に、「ヘボン山手家族寮」が見えます。ここはヘボン最



成佛寺

後の居住地で主として聖書の翻訳をしたり、総理として明治学院へ通ったりしたところです。比較的最近まで知られていませんでしたが、昭和53年「ヘボン博士顕彰会」の手でその場所を特定し、門柱にプレートをはめ込んだところです。ヘボンは帰国の1911年まで約10年間ここに住みました。

4 その他の記念碑

これには2か所あります。1つは横浜市戸塚区にある明治学院横浜戸塚キャンパスにある博士の胸像と説明の碑です。高谷道男先生の提唱で明治学院同窓会によって建てられたもので、除幕式は平成4年4月に行われました。胸像は白金キャンパスの原型を使って制作されたものです。

もうひとつは金沢区福浦の横浜市大医学部情報センター入口にヘボンの肖像レリーフがあります。さらに歌舞伎俳優三代目沢村田之助に米国製の義足を装着する様子を描いた錦絵があり、信楽焼の陶板の美しいもので、傍らに「ヘボン博士の暖かい近代医学への精神こそ横浜市大医学部の範とすべきである」と記されています。昭和62年に完成したものです。

[大滝紀雄]

ニュートン

G.P. Newton



幕末の開国後に、横浜に駐屯していたイギリス海軍の海兵の間に梅毒が蔓延して、日常の軍務にも支障をきたすようになりました。その対策として生まれたのが、横浜梅毒病院です。イギリス海軍軍医のニュートンが中心になって、遊女の強制的な検診と患者の入院

ガイド

横浜梅毒病院

神奈川宿本陣

(種痘接種)

※JR 東神奈川駅

京急 仲木戸駅)より徒歩 5～10分

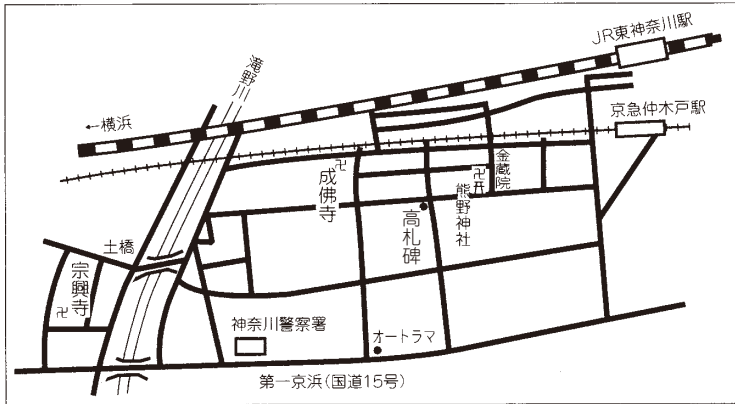


復原して本陣近くに建てられた高札

治療をおこないました。

1867年（慶応3年）9月、ニュートンがはじめて梅毒病院をひらいたのは吉原町（現在の中区長者町）であり、その町会所を仮病院として検診が開始されました。その翌年の6月18日に同じ吉原町に病院が新築されました。その後1873年（明治6年）になって、遊廓が吉原町から高島町に移転するのにともなって、病院も高島町9丁目（現在の西区高島町）に

梅毒と天然痘の 予防 治療に貢献



移転しました。

ニュートンは1867年（慶応3年）に来日し、横浜で精力的に駆梅事業と牛痘接種事業をおこないました。その結果1867年（慶応3年）冬から1870年（明治3年）秋にかけて、2千人あまりの患者を治癒させることができました。一方、種痘事業では1870年（明治3年）冬の天然痘の流行にさいしては、日本政府をうごかして種痘の強制接種をおこないました。横浜では吉原町会所と神奈川宿本陣（石井源左衛門宅）で接種をおこなって、天然痘予防に一役をかったのです。

これら輝かしい業績を背にして、ニュートンは長崎にも梅毒病院を設立しようと彼の地におもむきましたが、長崎での病院建設は多くの難問に遭遇し、いわれなき中傷誹謗をあびて、失意のうちに1871年（明治4年）5月24日長崎で客死しました。

[深瀬泰旦]



「神奈川宿歴史の道」の案内板

シモンズ

D. B. Simmons



横浜開港後の1859年（安政6年）11月1日、D. B. シモンズ（Danne. B. Simmons）は和蘭改革派教会の派遣宣教師兼医師として神奈川に到着した。S. R. ブラウン、G. F. フルベッキと一緒にあった。先に来日していたヘボンとは別に、宗興寺に居を構えたが、翌

ガイド

宗興寺（そうこうじ）

居留地82番

弁天通仮病院

野毛山修文館あと

※地図は5、11ページ参照

年の春には宣教師を辞して、完全なる医師としての道を選び、居留地82番に開業した。

辞任の理由は夫人が極端なユニテリアンで生活も派手であったことによるといわれる。

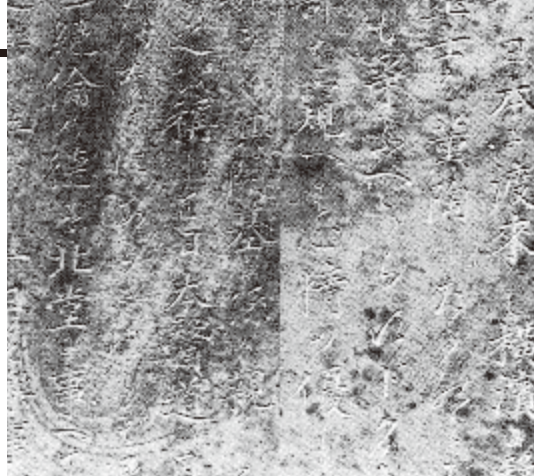
開業医としてのシモンズは好評であったが、翻然、欧州に渡り、英独仏の「大家碩学ト医術ノ討論研究シ」、再び来日した。

帰国後、フルベッキの推薦により、1870年（明治3年）3月、大学東校に奉職し、約1年間勤務した。

辞任後、1871年（明治4年）春、横浜元弁天通りに建設された仮病院に週1回の割合で勤務した。

この頃、即ち1872年（明治5年）1月、シ

ヘボンと並び 横浜近代医学の創始者 福沢諭吉との交遊



シモンズ博士の墓詩（部分）

モンズは神奈川県令あてに「防恙法建立執行之儀」の建言書を提出した。この建議はわが国で初めて伝染病予防の必要性を訴えたもので、わが国公衆衛生の嚆矢とされる。この建議が採用され、神奈川県令大江卓が立案、指導して制定されたのが、1873年（明治6年）の「家作建労条目」である。

週1回の割合で勤務していた仮病院が不幸にして焼失してしまうと、権令大江卓は病院の必要性を説き、再建を勧説し、1872年（明治5年）9月、横浜市中病院が設立された。これが野毛山修文館あと、現在の老松中学校の地に移転、1873年（明治6年）、十全医（病）院と改称されるが、シモンズは1873年（明治6年）6月より神奈川県雇医に任命された。月給320円。

以後、十全医（病）院の全権を与えられ、十全医（病）院の看板医として活躍、名医の名をほしいままにした。なかでも ①人体解剖と脚気死亡患者の病体解剖の施行 ②明治10年、11年と続くコレラ大流行の際の適切な治療と予防活動 ③県下全域への種痘の励行と実施などは高く評価されるべき業績である。

梅毒の治療にもすぐれ「梅毒小篇」の著書がある。当時もてはやされた駆虫剤セメンエンはシモンズの創出によるものとされ、広く、服用された。シモンズ直伝とされる薬用石鹼もある。

シモンズと福沢諭吉の交遊もまた特筆されるべきで、1870年（明治3年）シモンズ36歳、この年、福沢は発疹チフスで生死の間をさまよったが、シモンズの適切な加療が一命をとりとめたことから、両者肝胆相照らす仲となった。1873年（明治6年）、福沢が慶応義塾内に慶応医学所を設立すると、臨床講義を受け持つ一員となり、成医舎にもかかわりをもち、英米医学の担い手として活躍した。1880年（明治13年）3月、十全医（病）院を辞し、故国アメリカに帰り、ニューヨーク州ポーキプシーに住んだが1886年（明治19年）12月再び来日した。

以後、福沢の知遇を得て三田山上に居を構え、日本主義陣営の闘士として「時事新報」上に健筆をふるったが、不幸、病を得て、1889年（明治22年）2月死亡した。時に54歳、死因は腎炎であった。

[荒井保男]

エルドリッジ

S. Eldridge

ガイド

「近世医説」、神奈川県衛生顧問
 「日本の脚気」、山手病院院長
 「アイヌの矢毒」
 「ペスト概説」



横浜開港当時の医師エルドリッジ

1859年(安政6年)日本最大の貿易港として横浜港が開港しました。同時にアメリカやイギリスを始め各国の人々がいろいろの目的をもって来日したのです。この人達は必ずしも我が国にとって有益となったとは限りません

が、なかには本当に日本を愛し、日本人の為に力を尽くした人も数多くおります。その中の一人に横浜の医療に貢献し、いまは外人墓地に眠るエルドリッジがおります。

エルドリッジ (Stuart Eldridge) は1843年アメリカに生まれ、維新後間もない1871年(明治4年)28歳で来日し、翌5年北海道に渡り開拓事業の一環として造られた開拓使函館医学校の開校と同時に同校の教授となりました。当時は医学校教授としての人材

イギリス本国で没するも
 遺骨はヨコハマの地に
 函館、横浜で治療



が不足していたためでしょうか、基礎医学・臨床医学の全部の科目を一人で講義していたとの事です。

また、その頃開設された函館病院で一般患者の治療にあたっただけでなく積極的に病理解剖や司法解剖も行い、1874年(明治7年)ロシア人サルツの病理解剖、ドイツ人ハーバーの死体検案を行った記録が残っております。

函館での任期満了後横浜に移り、山下町の居留地に診療所を開業し、自宅を山手町167番地に定めて日本での本格的な医療に着手したのです。その間、神奈川県衛生顧問、十全医(病)院(横浜市立大学医学部附属病院の前身)外科、山手一般病院(現ザ・ブラフ・メディカル&デンタル・クリニック)院長、アメリカ領事館衛生顧問、慈恵成医会副会長などの要職を歴任し、明治中期における横浜の医療に貢献した彼の功績は高く評価されています。

エルドリッジは絵が得意であったため、医学の講義に使用する図などは画家の手をわす

らわすことなく自分で描いていました。また筆まめで多数の著述を残しておりますが、その主なものに「近世医説」「日本の脚気」「アイヌの矢毒」「ペスト概説」などがあります。進歩的な考えを持ち、火葬を提唱していた彼は遺言により荼毘に付され、生前の功績に対し日本政府より勲三等瑞宝章が贈られました。エルドリッジ夫人は夫の死後10数年間横浜に住んでいましたが、のちイギリスに移り彼の地で1930年(昭和5年)に亡くなり、遺骨は娘により日本に持ち帰られました。現在山手外人墓地の第4区、正面入り口を入って左に折れ、柵に沿って10メートルほど進んだ所に横たわる大きな十字架の墓石があります。むかって右側にStuart Eldridge、左側にFrances Heath Eldridgeと刻まれ、それぞれの生没年が記されており、生涯を通じて横浜の医療に力を尽くした夫妻はここに眠っているのです。

[衣笠 昭]

官修墓地

KANSYUBOCHI



ガイド

維新戦争

西区元久保町

太田陣屋

- 野毛山軍陣病院跡／京急日ノ出町駅より徒歩5分 JR桜木町駅より徒歩15分
- 官修墓地（久保山墓地）／市営バス③久保山霊堂前 JR保土ヶ谷駅よりタクシー10分 京急黄金町駅よりタクシー5分

長州墓地（両端は非入院者）

久保山官修墓地

1868年（慶応4年）4月、維新戦争は江戸開城のあと、江戸周辺、箱根、宇都宮などで新たな戦がおこり広がっていきました。

そのため維新政府は野毛山に軍陣病院を作り、戦傷者を収容して英国の公使館付医師であるW.ウィリス、B.G.シッドールらの治療をうけさせました。

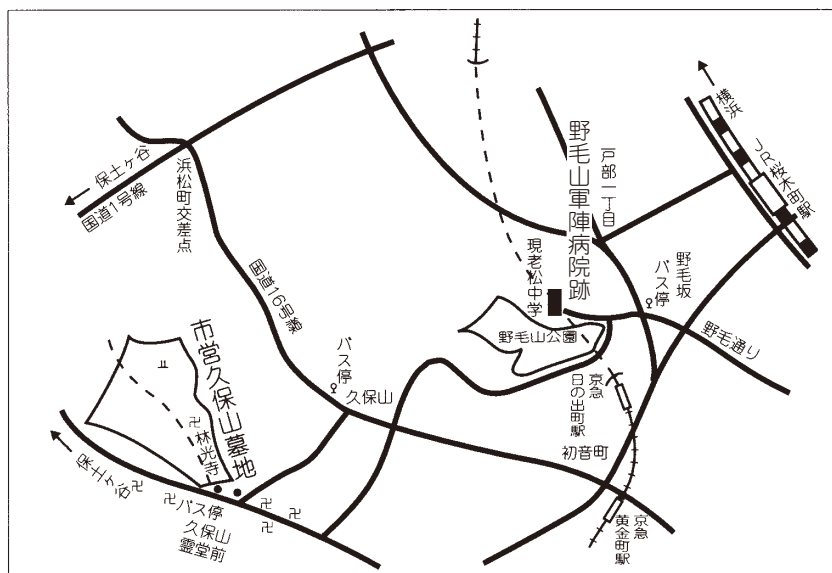
不幸にも横浜で死去した兵士のうち、土佐、

長州藩の方々の遺体は野毛の大聖院内に葬られました。

1874年（明治7年）7月、西区の久保山に共葬墓地が設けられたとき、大聖院からここに改葬されました。第3区には土佐藩の、第5区には長州藩の官修墓地があります。

埋葬されている兵士のほとんどが、1868年（慶応4年）の6月以降に太田陣屋（現在の京急日ノ出町駅前周辺、外国人警護のための

異郷での戦死者を葬う 土佐、長州藩の 兵士らの永眠の地



陣屋で5月19日以後は病院の主体となりました)で死亡していることが、最近の墓誌ならびに病院日誌の研究で明らかになりました。このことは従来の説と異なり両藩の兵士が洲千弁天語学所内で一人も死亡しなかったことを意味しています。

長州藩の墓地は、西区役所や山口県らによって小公園風に整備されています。(写真、両端は非入院死者)よくみると、8基の墓碑は神式に形をととのえてあります。一方、土佐藩の墓地は敷地が狭く、余り手が加えられておらず、5基の墓碑も丸味を帯びて仏式であることがうかがえます。

[中西淳朗]

野毛山軍陣病院

NOGEYAMA GUNJIN HOSPITAL

ガイド

維新戦争
ウィリアム ウィリス
修文館、太田陣屋
※地図は11ページ参照



野毛の修文館（明治6、7年ごろ）

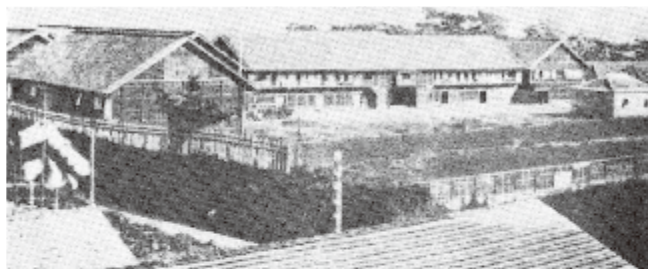
野毛山軍陣病院跡

1862年（文久2年）の6月11日に英国の医師ウィリアム ウィリスは公使館の一員として来日しました。間もなく横浜に移り生麦事件（閏8月12日）などのテロ事件の処理に働きました。その2年後、横浜に天然痘が発生し外国人にまで広がったとき、これの治療と予防接種に力をつくし、医師としての力量が高く評価されました。

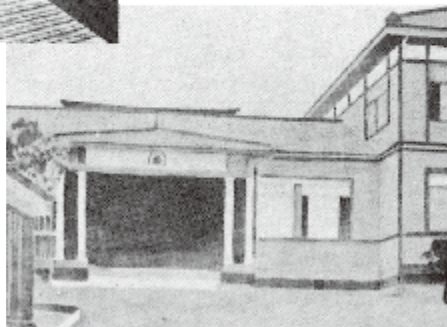
1868年（慶応4年）1月2日、維新戦争勃発のとき、ウィリス医師はパークス公使と共に大阪、兵庫に出張しており、鳥羽伏見の戦いの戦傷者の手当を所属藩を問わずに行っています。このときウィリスの外科医としての評判は特に薩摩藩で高かったのであります。

この年（1868）の4月11日には江戸城開城となりました。そのあと江戸周辺での小衝突がありましたので、新政府はウィリスを雇い

沿革を辿れば 横浜市立大学医学部 の前身



太田陣屋の旧病舎（明治4年夏ごろ）



十全医院正面玄関

4月14日付で病院を江戸に開こうとしました。しかし、彼はこの年に副領事に昇進しており、またパークス公使の息子の病気治療中で横浜を離れられないこともあって、閏4月17日に野毛山上の修文館に軍隊用の病院を開きました。ウィリスは次のようにレポートしています。“旧幕府の下で使用された漢文学校に患者が収容されました。やがて傷病兵の数は次

第に増加し収容限度をこえたため太田陣屋を使用しました。”野毛山上の修文館のあったところは、現在の老松中学校の地で、約7か月、軍陣病院として使われその後、この地に中病院が移転し1873年（明治6年）12月に十全医（病）院となりました。これが横浜市立大学医学部附属病院の前身であります。

[中西淳朗]



現在の横浜市大医学部附属病院(福浦)

横浜港

YOKOHAMAKO

ガイド

※地図は17ページ参照



開港当時の横浜

JR桜木町駅より南へ歩いて約20分、神奈川県庁の横を左に入ると横浜港を代表する中央栈橋が見えてきます。横浜港は1859年（安政6年）わが国最大の貿易港として開港しましたが、それ以前この地域は80戸ほどの漁師の家が散在する横浜村でした。それが一転して全国の生糸の輸出を独占する大都市となったのです。この発展の様子は横浜市歌を口ずさむ事で容易に想像できます。

わが日の本は島国よ
朝日かがよう海に
連なりそばたつ島々なれば
あらゆる国より船こそ通え

ここに一枚の写真があります。開港当時来日したフランス人ベアトが横浜を撮影したのですが、現在の横浜から見ると想像ができないような貧しい町です。

されば港の数多かれど
この横浜に勝るあらめや
昔思えば苦屋のけむり
ちらりほらりと立てりしところ

その後、貿易港としての役割は次第に増加し、拡張に次ぐ拡張で商港区と工業港区とに分割され、その機能を発揮しつつありました。

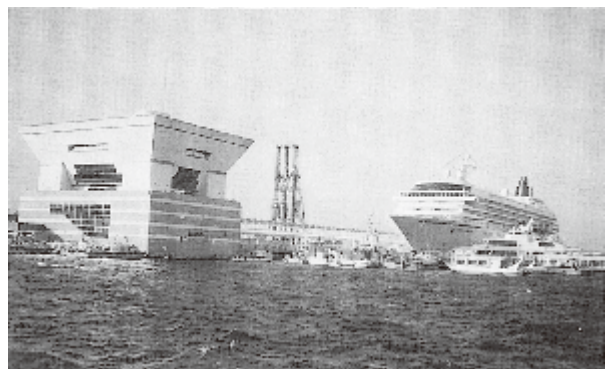
1923年（大正12年）9月1日関東大震災が発生し、横浜港も壊滅的な被害を受けました。

現代史の玄関口

明治以前は一寒村



開港資料館内の玉楠



現在の横浜港

周囲の建物は灰燼に帰し、現在横浜開港資料館になっている英国領事館も瓦礫の山となったのですが、この中庭に一本の玉楠がありました。この木の近くで1854年（嘉永7年）3月31日米和親条約すなわち神奈川条約がペリーと林大学頭の間に結ばれたといわれていますが、もちろんこの木の幹も焼けてしまいました。しかし残った根から復興の横浜を象徴するように新たな芽が息吹き始め、現在では四季を通じて資料館の庭にその影を投げかけております。

昭和に入ってからには神戸港を凌ぐ発展をとげ、1937年に停泊した船は6,225隻であったものが1968年には11,484隻におよび、アメリカを始めイギリス、ノルウェーなどよりの船が相次いで入・出航しました。この間1945年第2次世界大戦終結と共に駐留軍に接收され一時はその繁栄を失いましたが、接收の解除につれ往時の賑やかさを取り戻しました。大棧橋埠頭の隣にある山下公園から眺めると優雅な形をした外国航路の船が横づけになっており、町にはその昔人力車夫から発生したと

伝えられる横浜英語が飛び交い、さまざまな服装をした外国人がさざめくエキゾチックな場所として発展してきたのです。

今は百船百千船
泊まる処ぞ見よや
果てなく栄えて行くらん御代を
飾る宝も入りくる港

とはいえ最近では陸路交通や航空路線の発達により海運業は次第に衰退の一途をたどり、往年の華やかさは見るべくもありません。しかし横浜に生まれ育った人たちは、この歌に象徴されるようにますますの発展を期待して日夜努力を重ねているのです。

太平洋を目の前に
踊る希望の盾あげて
諸手さしのべ叫ぶべし
古き誇りと新しき
力みなぎる喜びを
築けよ港横浜の
不朽の塔をいや高く

（横浜行進曲より）

〔衣笠 昭〕

丸 善

MARUZEN

ガイド

商社「丸屋」
 静々舎
 医薬分業の始
 境(堺)町(現日本大通)



平成7年頃の丸善横浜ビル



丸善と早矢仕有的

西洋文明の輸入地である横浜にとって丸善は忘れることのできない日本の商社です。

この商社ははじめは丸屋といい外国の本や雑誌、薬、病院で使う器械などを専門に輸入して販売しました。

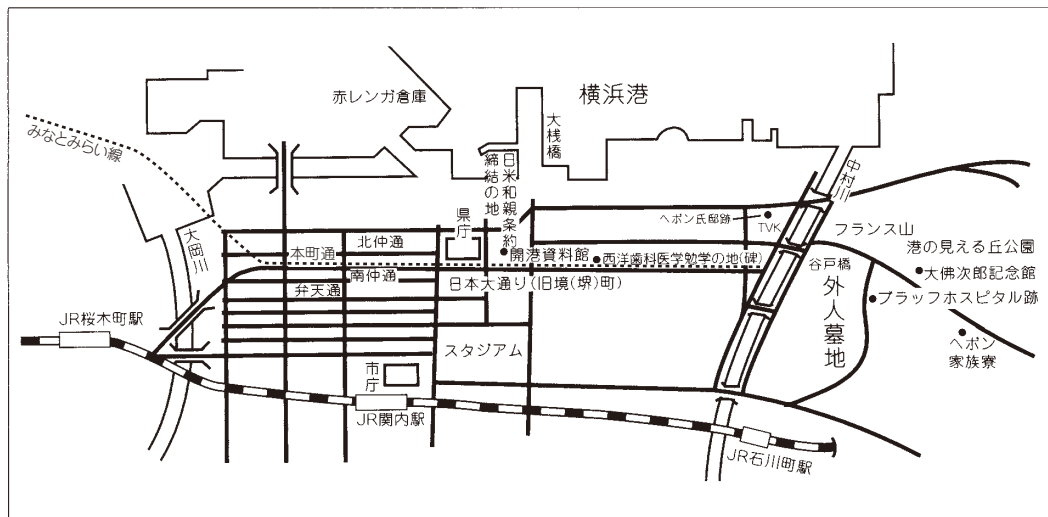
この商社を作った早矢仕有的（はやし・ゆうてき）は、1837年（天保8年）の生まれで今の岐阜県出身です。その地で有的は漢学、

医学、蘭学を勉強し、1859年（安政6年）8月に江戸に出て町医者となりました。

1867年（慶応3年）の2月頃、築地の福沢塾に入門し、英学を学び3才年上の福沢諭吉に指導をうけるようになりました。

翌年の8月、横浜の吉原町（いまの長者町付近）に梅毒病院ができました。院長職の英医ジョージ・ニュートンの下に早矢仕有的は医員として勤めました。この時の苦勞が丸屋

発祥の地
 今も弁天通に
 その名をとどめる



という商社をつくる動機となりました。1869年（明治2年）にできた丸屋の経営については福沢諭吉も肩入れしましたので、東京に支店をだし慶応義塾と深くつきあいました。

早矢仕が横浜にはじめて住んだのは新浜町でしたが、後に相生町、境(堺)町と移転しました。境(堺)町1丁目に1870年(明治3年)静々舎という診療所を作り、同時に2丁目に丸屋薬局を開きました。病人は診療所で薬の処方を書いた紙をもらい、薬局で調合してもらうという欧米のシステム(医薬分業)を彼は実践してみせました。

「中西淳朗」



平成7年頃の弁天通り

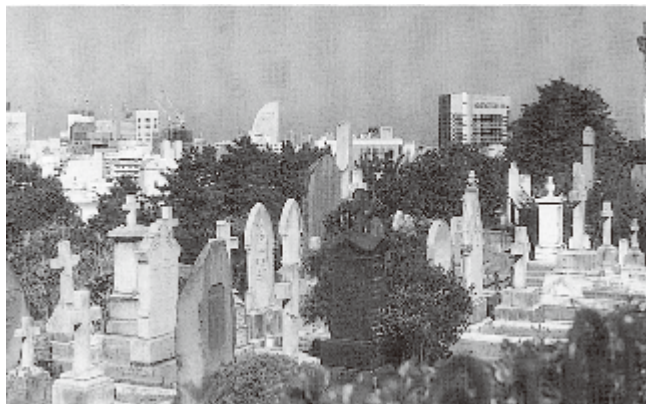
外人墓地

General Cemetery on the Bluff

ガイド

1861年設置

※地図は17、21ページ参照



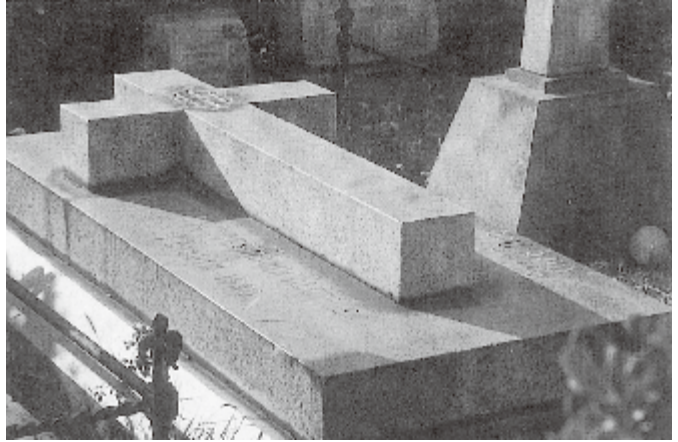
外人墓地といえば横浜に異国情緒をそえる代表的な場所である。4つあるうち、特に中区山手町96の墓地は市民に親しまれている。

開国の調印交渉中にアメリカ兵の死者が出たことが引き金になって、1861年に設置された。その後外国人の殺害事件が続き、犯人があがらないまま、墓地は土地も管理も日本側が負担せざるをえない状態が続いた。墓地が故人の安住の地や異国情緒を伝える場所だけ

ではなく、外交や政治的なかけひきが背景にあったことも忘れてはならない。

現在4,000人以上が埋葬されているが、宣教師、船員、商人、教員など横浜と関係の深い多くの職種の人々が含まれている。関東大震災のとき、当時3,000人近い外国人が横浜に在住していたが約3分の1の人々が犠牲になり、その多くがこの墓地に永眠しているので1923年没の人の数が目につく。

沈黙の歴史の宝庫
資料館をえて
粧いも新た



エルドリッジの墓

医学関係者ではエルドリッジ (S. Eldridge, 1843～1901, 米) の墓石が墓地正面に入って左の道路沿いにある。柵の外からも見える他、横浜市立大学医学部附属病院の前身であった十全医院の医師として働いたウィーラー (E. Wheeler, 1841～1923, 英)、日本に働く外国人の健康管理を担当したパーセル (T. A. Purcell, 1841～1877, 英)、山手病院で働いたダリストン (J. Dalliston, 1821～1875, 英)、フランス人ではマッセ (E. Massais, 1836～1877)、メクル (A. Mecre, 1846～1917) などの医師、日本薬局方の編纂に協力したり、後の神奈川県第一衛生試験所 (現神奈川県衛生研究所) の基礎を作ったヘールツ (A. F. C. Geerts, 1843～1883, 蘭) らを偲ぶことができる。

[大村敏郎]

山手病院

The Bluff Hospital

ガイド

The Yokohama Public Hospital
The Yokohama General Hospital
The Bluff Hospital

●神奈中バス11系統 元町公園前下車



開院以来功績者名を刻んだ銅版

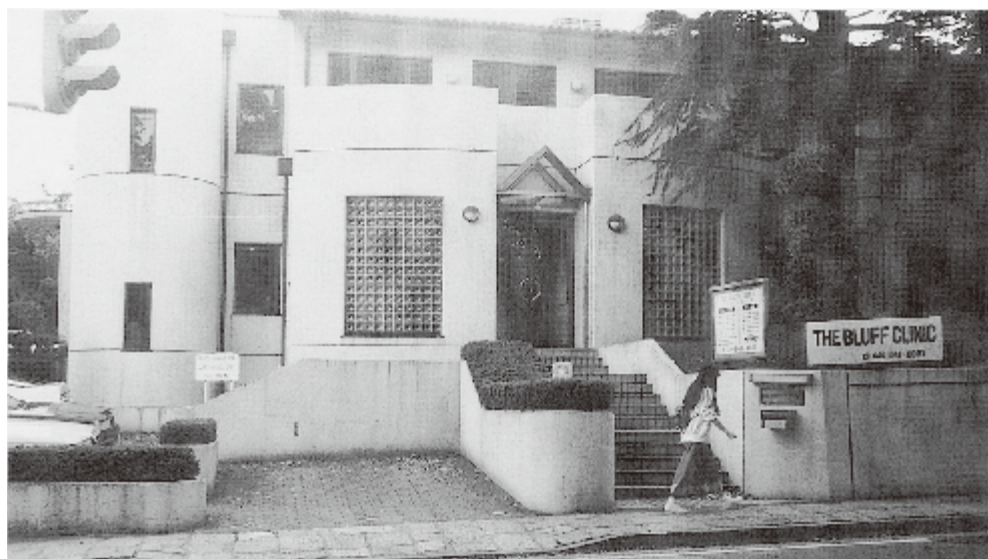
横浜山手病院は1982年に廃院になり、120年近い歴史を閉じた。今は辿るよすがになるものは上掲の写真にみる銅版のみで敷地の一部がクリニックになっている。

居留地住民のため、つまり外人専用の病院として1863年に山下町88番地に建てられた。はじめThe Yokohama Public Hospitalと呼ばれ、1867年からはThe Yokohama General Hospitalと改称したが、

山手の断崖の近くにあったため断崖絶壁という意味の英語bluffという言葉を使ってThe Bluff Hospitalと呼ばれたこともあった。Bluffは固有名詞としては横浜山手のことと辞書にも刻されている。

1923年関東大震災で倒壊し火災にもあった。1937年山下町81,82番地に再建。その間は仮施設でしのいだ。第2次大戦が激化し、1944年に山手地区が外人立入禁止区域になったため

数多の名医による
歴史的な役割を果たし
今は診療所として…



平成7年頃のブラッフ・クリニック

横須賀海軍病院に賃貸された。戦後は進駐軍に接收され正式名がThe Bluff Hospital（山手病院）となった。開港から明治・大正・昭和も戦前・戦後と激動の時代を横浜で個性ある病院として生きのびてきたが、患者数が減ったため日本人患者も受け入れるように変わり外人専用という個性的な存在意義をなくして姿を消すことになった。

関東大震災で貴重な資料が何も残されていないので、この病院の歴史的なことは検証できないが、ここで活躍した医師たちの中には初代院長のジェンキンス（G.R. Jenkins, 1834～1870）の他、エルドリッジ（S. Eldridge, 1843～1901）、マンロー（N.G. Munro, 1867～1942）、ウィーラー（E. Wheeler, 1841～1923）など日本の医学・医療に大きくかかわった人々がいて、それらの活動の温床であったことは否定できない。



杉田玄白と間宮林蔵

SUGITA GENPAKU & MAMIYA RINZO

ガイド

杉田長安

長安寺(川崎)

妙法寺(杉田)

● 妙法寺／JR及びシーサイドライン新杉田駅より徒歩
10分 NTT前の信号を右へ入る



妙法寺

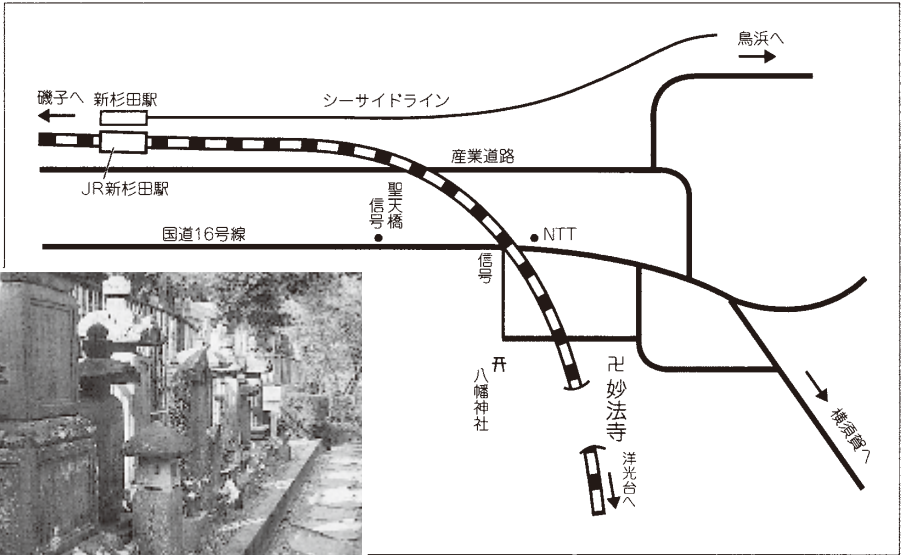
杉田玄白と間宮林蔵

わが国の医学の歴史の上で燦然として輝いている『解体新書』の翻訳、出版にあたって、前野良沢とともに中心的役割をはたしたのが杉田玄白です。

間宮林蔵は1809年（文化6年）にシベリア探険によって、樺太が大陸と陸つづきでないことを確認し、間宮海峡の発見者として有名です。

この玄白と林蔵の二人は親類関係にあり、横浜がその共通の遠祖の地なのです。戦国時代、真野新左衛門信安は武蔵国久良岐郡杉田邑にすんで、後北條氏の家臣であった間宮豊前守信高につかえていました。軍功によって姓を間宮とあらためることをゆるされ、その子長安もやはり後北條氏につかえていましたが、主家の滅亡とともに東国を流浪し、のちふたたび杉田村にかえって姓を杉田とあらた

二人の開拓精神 横浜の地にルーツ



間宮家の墓地（妙法寺境内）

めました。

このころ分家した間宮氏は以後、杉田の領主となり一方、長安の子孫は稲毛領菅生村（現在の川崎市宮前区）に住むようになりました。そこで長安の墓は菅生の長安寺にあります。杉田間宮氏の墓は牛頭山妙法寺（磯子区杉田5丁目）にあります。

玄白は長安の五世の孫にあたります。祖父初代甫仙の代から小浜藩につかえ、江戸に住むようになりました。

江戸時代から明治の中ごろまで、杉田は梅林の里として有名でした。『江戸名所花暦』（文政10年）にも「花の頃は東都の遊客旅立ちぬ」とあって、江戸人も足をはこんでいたことがしるされています。これは妙法寺あたりの地域なのです。

[深瀬泰旦]

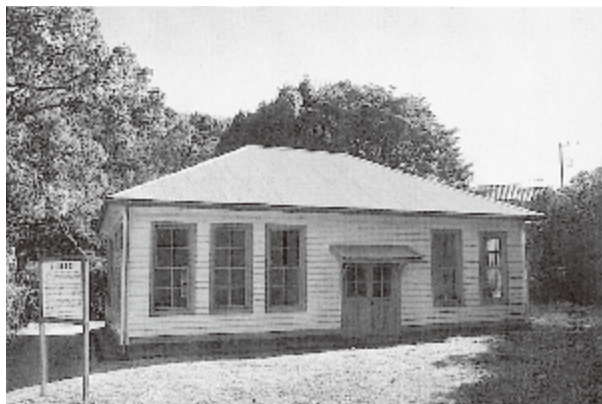
樹齢650年をこえる榎カシの木（境内）

野口英世

NOGUCHI HIDEYO

ガイド

横浜(長浜)検疫所

野口英世博士ゆかりの細菌検査室保存
をすすめる会/機関誌「ながはま」●シーサイドライン幸浦駅より徒歩10分
京急 能見台駅より徒歩15分

ゆかりの細菌検査室



検疫資料館

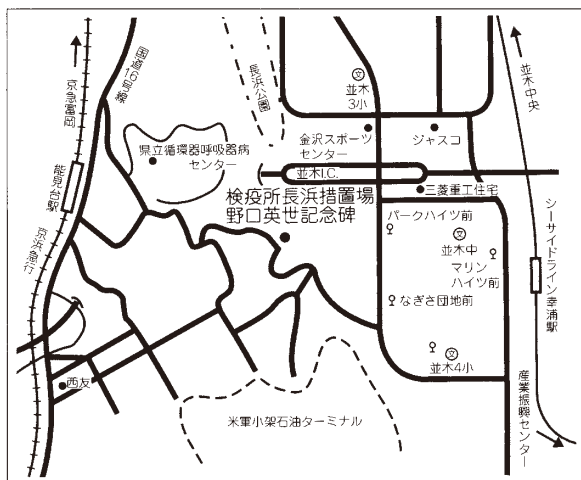
野口英世と横浜

京浜急行金沢八景駅とJR新杉田駅を結ぶシーサイドラインの幸浦駅近くに、並木地区住民の憩いの場所であるなぎさ公園があります。ここはその名の示すとおり昔は東京湾の波打ち際でありました。この公園の西側にある神奈川県立循環器呼吸器病センターに通ずる細い道を上っていきまると右側に横浜検疫所があり、正面にねじれた形をした碑が立っ

ています。この奇妙な形は野口英世が梅毒患者の中枢神経より初めて発見した梅毒スピロヘータをあらわしたもので、野口英世博士を称える記念碑なのです。

この検疫所の横に緑に囲まれた明治時代ヨーロッパ風の建物があり、これがかつて野口英世の勤務した細菌検査所です。現在は記念館となっていますが、昭和20年代は細菌検査室と病室があり、実際に業務を行って

ゆかりの細菌検査室は
保存会・市のお蔭で
立派に史跡として…



野口英世記念碑

おりました。外国人を収容する施設だったためすべて洋風で、白く塗ったテラスが印象的だったことを覚えております。

野口英世は1900年（明治32年）より内務省医官補としてこの細菌検査所に勤務し、海港検疫法による来日外国人の検疫・伝染病患者の隔離に従事しておりました。当時入港予定の外国船よりペスト患者を発見、国内に蔓延流行する惨事を未然に防いだ功績を残しております。

建物はL字型になっており、中に入りますと部屋が数室に別れており、当時使用されていた検疫用のいろいろな器具や、当時この検査所を訪れた有名人の書が整然と展示してあります。細菌検査室には野口英世の写真が飾られ、顕微鏡その他の検査用具が当時を物語るております。

その後野口英世はアメリカに渡り、ついでガーナで黄熱病の研究中感染して逝去されたことはよく知られており、その功績を称えた

銅像や野口の名をつけた研究所が世界各地に存在します。

昭和30年代になって外来伝染病が少なくなったため、検疫業務が縮小され、この細菌検査所も閉鎖されました。その後は訪れる人もなく荒れるにまかせたのですが、野口英世の功績を称える市内有志の方の御努力により「野口英世博士ゆかりの細菌検査室保存をすすめる会」が結成され、横浜市当局の協力のもとに建物の清掃・保存に尽力されております。機関紙「ながはま」は1995年5月で21号を発行し、事務局を横浜市南区永田台27の18に置き、代表者は小暮葉満子氏であります。

国の内外にその名を知られた野口英世博士と横浜との関係は、検疫という国民生活に重要な業務によって結ばれておりました。この緑豊かな地に建っている細菌検査所を見学し、博士の偉大な功績を思い起こすことも横浜を知るひとつではないでしょうか。

[衣笠 昭]

13

金沢文庫

KANAZAWABUNKO

ガイド

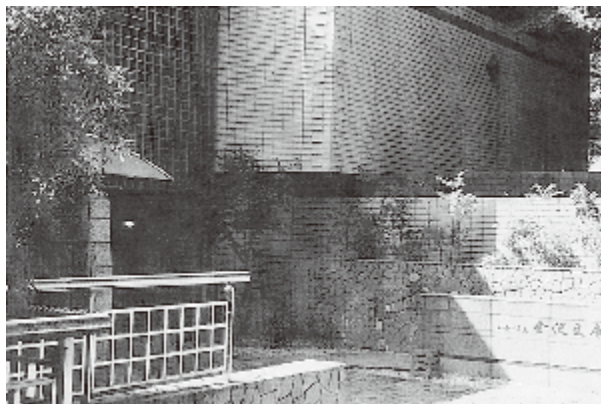
称名寺

北条実時

兼好法師

●京急 金沢文庫駅より徒歩10分

●シーサイドライン海の公園柴口駅より徒歩10分



装いも新たな文庫

京浜急行金沢文庫駅を降り、約800mほど閑静な住宅街を歩きますと、左手に1258年（正嘉2年）頃北条実時の創建による称名寺があります。この境内に現在整備された昔のトンネルがあり、これを抜けると目の前に近代的な神奈川県立金沢文庫の建物が建っております。

この金沢文庫の歴史は古く、鎌倉幕府の執権北条義時の孫実時が1275年（建治元年）こ

ろ創建されたと言われています。実時は幼い時より学問を好み、早くから儒家清原教隆に師事して政治・法制・農政・軍学・文学など広範囲の書物を学んでおりました。晩年病を得て幕府の要職を引き、鎌倉の邸宅よりこの地金沢に住むと同時にその膨大な書物も移され、金沢文庫の基礎となったのでした。

金沢文庫は実時の没後その子顕時、貞顕、そして孫の貞将と引き継がれていきましたが、

武家文化を偲び 極楽浄土を模した 称名寺境内に学ぶ

横浜医史跡めぐり年表

下線部は本文内容を参照

西 暦（元号）	事 項
1200（正治2）	米西 寿福寺を開く
1260（文応元）頃	実時 称名寺を建立
1267（文永4）	忍性 鎌倉極楽寺を開き医療を始める
1287（弘安10）	〃 桑ヶ谷に療（養）病院
1594（文禄3）	杉田村に間宮長安住み杉田姓に
1815（文化12）	ヘボン 生る（ペンシルバニア州ミルトン）
1853（嘉永6）	ペリー 浦賀へ
1854（ 〃 7. 3）	日米和親条約（神奈川条約）
1856（安政3）	ハリス 下田へ
1858（ 〃 5. 6）	日米修好通商条約
1859（ 〃 6. 6）	神奈川（横浜）・長崎・函館開港
〃 （ 〃 6. 10）	ヘボン 神奈川の成佛寺に
	シモンズ ブラウン 相次いで来日
1861（文久元）	ヘボン 宗興寺にて診療
1862（ 〃 2）	ウィリス 来日 生麦事件
1862（ 〃 2. 12）	ヘボン 居留地39に住居
1863（ 〃 3）	〃 診療始める
〃 （ 〃 3）	山下町88 クリークサイドにヨコハマパブリックホスピタル開院（院長 G.ジェンキンス）
1866（慶応2）	上記ブラッフに移転
1867（ 〃 3）	ヘボン 沢村田之助の下腿切断術
〃 （ 〃 3. 6）	ヨコハマパブリックホスピタルはジェネラルホスピタルに
	吉原町に梅毒病院開設
1868（明治元）	ウィリス 軍陣病院開設（7月東京に移転）
〃 〃	義足第一号沢村田之助に
〃 〃	新浜町に丸屋商社（現在の弁天通2-34）
〃 〃	鳥羽伏見の戦い ウィリス京都へ
1870（ 〃 3）	静々舎（境町1丁目） 丸屋薬局（境町2丁目）に医薬分業
〃 （ 〃 3. 11）	ニュートン 天然痘流行し吉原町会所と神奈川本陣にて種痘
	シモンズ 福沢諭吉の治療

西 暦 (元号)	事 項
1871 (明治4)	早矢仕有的 北仲通6丁目に仮病院
1872 (5)	早矢仕有的・大江卓ら太田町6丁目に横浜病院 (市大病院の前身)開設 シモンス勤務
1873 (6.12)	横浜病院を <u>修文館</u> あとに移転、横浜共立病院となる
1874 (7.2)	横浜共立病院は県立となり十全医院となる
1874 (7.7)	官修墓地 久保山に移葬
1876 (9)	ヘボン 居留地39の診療所閉鎖
1879 (12.7)	長浦に防疫所
1883 (16)	コレラ菌発見 (コッホ)
1885 (18)	ヘボン 標準ローマ字会設立
1891 (24)	神奈川県(立)十全医院は横浜市十全医院に
1894 (27)	ペスト菌発見 (北里・エルサー別々に)
1895 (28)	防疫所 長浦から <u>長浜</u> に移転
1897 (30)	赤痢菌発見 (志賀)
1900 (33.5)	野口英世 長浜へ
1915 (大正4)	鼠蚊症スピロヘーター発見 (二木・高木)
1923 (12)	関東大震災
1925 (14)	浦舟町に十全医(病)院移転
1944 (昭和19)	十全医院 市立医学専門学校付属十全病院となる
1945 (20)	ヨコハマジェネラルホスピタルはブラッフホスピタルと改称
1982 (57.9)	ブラッフホスピタル閉鎖

〔付記〕

十全病院の前身である施設について、従来から横浜中病院、横浜市中病院、市中共立病院など多くの名称で記載されているが、市史編集室および横浜市立大学医学部附属浦舟病院では最も妥当と思われる公的な記録から「横浜病院」の名称を使用の方が正しいとの見解を示し、平成6年度刊行の「病院要覧」から上記のように訂正し発行した。

〔資料〕

神奈川県史料
横浜市史稿
かながわの医療史探訪……………大滝紀雄
草創のとき……………横浜市立大学医学部同窓会編
丸善百年史……………丸善

あとがき

今までに詳しく書かれたものには、本書の執筆者の一人である大滝紀雄先生の立派な本がありますが、実際に手にして医史跡めぐりをするにはもう少しコンパクトなものが欲しいと考えていました。内容的にも少し足りないかと思う位がかえってよいのかもしれませんが。本書を手にして現地を訪れ「横浜医学資料館」へのイメージをふくらまして下さいますよう。

井出 研

執筆者一覧（役職は発刊当時のもので50音順）

アラ イ ヤス オ 荒井保男	日本医史学会会員	放送大学客員教授
オオタキトシ オ 大滝紀雄	//	大滝医院院長
オオムラトシロウ 大村敏郎	//	川崎市衛生研究所所長
キヌガサ アキラ 衣笠 昭	//	松島病院副院長
ナカニシアツ オ 中西淳朗	//	中西医院院長
フカ セ ヤスアキ 深瀬泰旦	//	東京慈恵会医科大学講師

〔編集者（役職は発刊当時もの）〕

イ デ ケン 井出 研	横浜市立大学医学部同窓会倶進会会長 （現 一般財団法人横浜総合医学振興財団 理事長）
スギ タ キドウ 杉田暉道	日本医史学会会員、神奈川県予防医学協会 産業保健部

横浜**医**史跡めぐり

発行日■	平成 7 年12月 1 日	第1刷
	平成 8 年 2 月20日	第2刷
	平成 9 年10月16日	第3刷
	平成13年 3 月31日	第4刷
	平成14年10月10日	第5刷
	平成17年12月14日	第6刷
	平成23年 3 月31日	第7刷
	平成30年 3 月31日	改訂版第1刷

発 行 ■ (一財)横浜総合医学振興財団

〒236-0004 横浜市金沢区福浦3-9
公立大学法人
横浜市立大学医学部内
電話045-788-8635

価 格 ■ 250円+税

編 集 ■ 井出 研
杉田暉道

印 刷 ■ (株)ポートサイド印刷
